

高橋氏文考

倉野憲司

高橋氏文の全きものは今に伝はつてゐない。纔かに本朝月令・政事要略・年中行事秘抄等に、短い逸文二篇をとどめてゐるに過ぎない。それらを集めて註解を施したものが、伴信友の高橋氏文考註である。但し信友は、本朝月令の六月十一日神今食祭事の条に「高橋氏文云」として引用してゐる延暦十一年三月十九日の太政官符を、「素より在来れる氏文に書副へたるものなり」と言ひながら、やはり一つの逸文として取り扱つてゐるがそれは謬りであつて、右の太政官符を氏文の逸文と認めるわけには行かない。即ち高橋氏文の逸文は二篇のみであつて、校註日本文学大系第一巻に右の太政官符を略いた二篇を収載してゐるのは正しい見解である。

然らばこの逸文の成立は何時頃であらうか。逸文一（本朝月令、六月朔日内膳司供三忌火御飯一事の条所引）の末尾に、

迄三于今朝廷歳次二千戌一、并卅九代。積年六百六十九歳。延暦十一年。

とあるから桓武天皇の延暦十一年に成立したものと思はれさうであるが、前述の太政官符を見ると、

去延暦八年。為有私事。各進二記文。即喚三二氏。（高橋、安曇）勘二問事由。兼搜三檢日本紀及二氏私記。乃知二高橋氏之可先。

とあり、又、

謹案二日本紀。卷向日代宮御宇大足彥忍代別天皇五十三年。巡二狩東国二渡二淡門。是時聞二覺駕鳥之声。欲見三其形。尋レ之出二海中。仍得三白蛤。於是膳臣遠祖名磐鹿六鴈。高橋祖也。以レ蒲為三手纒。白蛤為三贈而進之。故美二六鴈臣二而賜三膳大伴部。檢三其家記。略同三於此。是高橋氏預三奉御膳二之由也。

とある。而してここに「其家記」とあるのは、明らかに高橋氏文のことであるから、前の「私記」といふのも亦氏文のことであらうと推定される。（因みにこの官符の中には「氏記」といふ語も見えるが、これも氏文のことと思はれる）さすれば、高橋氏文は少なくとも延暦八年以前に成立してゐた事が察知されるのである。

併しながらその成立については、今少し詳細に考へてみる必要

がある。先づ逸文一を見ると、その中に「上総国安房」とある。ところが安房が上総に含まれてゐたのは、養老二年四月までで、五月には上総の国の平群・安房・朝夷・長狭の四郡を割いて安房の国が置かれてゐるから（続日本紀）、これによると、この氏文の成立は養老二年五月以前と見られるやうである。然るにこの氏文には、日本書紀に基づいて書かれたと思はれる箇所がある。さうすると書紀が撰進された養老四年五月以後の手が加へられてゐることは明らかであつて、この二つの事実に拠ると、この氏文は養老二年五月以前に一旦成立し、同四年五月以後に書紀に基づいて多少の潤色改変が施されたと考えることが出来る。ところが上総の国と安房の国との関係については、更に考ふべき事實がある。即ち続日本紀天平十三年十二月の条に「安房国并上総国」とあり、同天平宝字元年五月の条に「其能登。安房。和泉等国。依旧分立」とあるのがそれである。これによると、「上総国安房」と氏文にあるのは、上総の国から一旦分立してゐた安房の国が再び上総の国に併合された天平十三年十二月から、更に両国が分立した天平宝字元年五月までの間に記されたものではあるまいかといふ疑問が起こる。現に伴信友の如きは、

此氏文、古き書とは見えなれど、発端の文は上に論へる如く日本紀に依て書出せりと見えて、それ撰ばれたる養老より前に記せるものとはおもはれず。然れば中^{ナカ}度^{カタク}安房^{ヤナフ}国を上総^{ウツノ}国に並せられたる天平十三年より旧の如く国に立られたりし天平宝字元年までの間に書記せるものなるべし。（高橋氏文考註）と推定してゐる。（尤も信友はその次に分註して、「其頃此氏文

を始て書記したらむといふには非ず。いとはやく書記したる文どもものけるを、更に續^{ワシト}写^{シテ}たりけむとかつはおもはるるなり」と言つてゐる）而してかう考へると書紀との関係も概やかであるが、「上総国安房」の記載のみから、この氏文の最初の成立年時を決することは甚だ困難といはねばならない。といふのは、逸文二（政治要略、年中行事部、十一月中卯日新嘗祭の条所引）の中に、「上総国乃長止毛淡国乃長止毛」の語が見えてゐるからである。前の筆法によると、この逸文は上総安房の両国が分立してゐた天平十三年十一月以前か、若しくは天平宝字元年五月以後の記述に係るものと言へるのである。さうすると逸文一と逸文二とは成立年時が異なるといふ結果を招来する。かやうな次第で高橋氏文の成立年時は種々考へられて、これに明確な断定を下すことは困難であるが、仮令最初の成立が養老二年以前であるとしても、その後の加筆や潤色改変が施されて、今日見るやうな姿（固より二つの逸文に過ぎないが）となつたのは、多分天平宝字元年五月以後、延暦八年以前のことではあるまいかと推測されるのである。安房が上総に属してゐたとする記載と、それぞれ分立してゐたとする記載のあること、書紀に拠る潤色が施されてゐること、文辭が平安時代のものに近くて奈良時代初期以前のものとは思はれないこと（親王・宣命使などの語に注意されたい）等は、この推測を助けるものである。

さて齋部氏がその地位と職掌とに關して中臣氏と抗争したやうに、高橋氏も同じく神事の御膳に奉仕した安曇氏と屢々相争つたが、その抗争はかなり激烈であつた。その間の消息を明らかに物

語つてゐるものが、前述の本朝月令、六月十一日の神今食祭事の条下に、「高橋氏文云」として引用してある延暦十一年三月十九日の太政官符である。これは高橋・安曇二氏の関係がわかるだけでなく、氏文の性質・機能等も知られ、且つはまた信友によつて逸文の一つとして取り扱はれてゐる程のものであるから、左に全文を掲げて参考に供することとする。

高橋氏文云。太政官符。神祇官定下高橋安曇二氏供奉神事御膳行立先後上事。

右被_レ右大臣宣_レ傳。奉_レ勅如_レ聞。先代所_レ行。神事之日。高橋朝臣等立_レ前供奉。安曇宿禰等。更無_レ所_レ争。

但至_二于飯高天皇御世。靈龜二年十二月。神今食之日。奉膳從五位下安曇宿禰刀語_二典膳從七位上高橋朝臣乎具須比_一曰。刀者官長年老。請立_レ前供奉。此時乎具須比答云。神事之日。供_二奉御膳_一者。膳臣等之職。非_二他氏之事_一。而刀猶強論。乎具須比不_レ肯。如此相論。聞_二於内裏_一。有_二勅判_一。累世神事。不可_二更改_一。宜_二依_レ例行_レ之。自_レ爾以來。无_レ有_二争論_一。

至_二于宝龜六年六月_一。神今食之日。安曇宿禰_二廣吉_一。強進_レ前立。与_二高橋波麻呂_一相争。挽_二却_レ廣吉_一。事畢之

後。所司科_レ祓。于_レ時波麻呂固辭。無_レ罪何共為_レ祓。是言上聞。更有_二勅判_一。上中之祓。科_二廣吉_一訖。其後廣吉等。妄以_二偽辭_一。加_二附氏記_一。以此申聞。自得_レ為_レ先。因_レ茲高橋朝臣等。雖不_二敢披訴_一。而憂憤之狀。稍有_二顯出_一。

去延暦八年。為_レ有_二私事_一。各進_二記文_一。即喚_二二氏_一。勘_二間事由_一。兼搜_二檢日本紀及二氏私記_一。乃知_二高橋氏之可_レ先。而事經_二先朝_一。不_レ忍_二卒改_一。思_二欲令_二一先一後彼此無_レ憂。雖未_レ勅_二所司_一。而每_レ臨_二祭事_一。宣_二知二氏_一。通令_二先後_一。

而今内膳司奉膳正六位上安曇宿禰繼成。去年六月十一月十二月。三度神事。頻争_レ在_レ前。猶不_レ肯進。仍勅。應_二通先後之狀_一。比來頻已告訖。宜_二此度依_レ次令_二高橋先_一。而繼成不_レ奉_二宣勅_一。直出而退。竟不_レ供奉。為_レ臣之理。豈如_レ此乎。宜_二稽_二故事_一。以定_二其次_一。兼論_レ所_レ犯。准_レ法科断_上者。謹案_二日本紀_一。卷向日代官御宇大足彥忍代別天皇五十三年。巡_二狩東国_一。渡_二淡門_一。是時聞_二覺駕鳥之聲_一。欲_レ見_二其形_一。尋_レ之出_二海中_一。仍得_二白蛤_一。於是膳臣遠祖名磐鹿六鴈。高橋祖也。以_レ蒲為_二手繩_一。白蛤為_レ膾進之。故美_二六鴈臣_一而賜_二膳大伴部_一。檢_二其家記_一。略同_二於此_一。是高橋氏預_二奉御膳_一之由也。及_二輕島明宮御宇_一菅田天皇三

年。処々海人。訕吠之不從命。乃遣安曇連祖大浜宿禰。平之日。為海人之宰。是安曇氏預奉御膳之由也。又安曇宿禰等歟云。御間城入彥五十瓊殖天皇御世。已等遠祖大栲成吹。始奉御膳者。仍檢其私記文。追注行下。筆迹殊拙不庶字。奸詐之端。於是見矣。然則考之國史。求之家記。磐鹿六鴈。委質於前。大浜宿禰。策名於後。時經五代。歲逾三百。相去懸遠。更无可疑先後之次。事已灼然。理須下以高橋為先。安曇在後。又繼成固執偽記。臨事爭先。恣意遁去。遂不供奉。不承詔命。無人臣礼。此而不正。何以懲後。仍案職制律云。對捍詔使。而無人臣之礼者絞。名例律云。對捍詔使。而無人臣之礼者。為大不敬。又云。犯八虐獄成者除名者。今繼成所犯。准犯依律。處絞刑。令除名。謹具狀奏聞者。奉勅。宜下宥其死。以處中遠流上。自余依奏者。官宜承知以為永例。符到奉行。

延曆十一年三月十九日

(延曆)
(因みに類聚國史卷八十七、刑法一、配流の条には、十一
年三月壬申。流内膳奉膳正六位上安曇宿禰繼成於佐渡
國。初安曇高橋二氏。常爭下供奉神事。行立前後上。是以去
年十一月新嘗之日。有勅以高橋氏為前。而繼成不遵二

詔旨。背職出去。憲司請誅之。特有恩旨以減死」とある)

太政官符。神祇官。

高橋安曇二氏、神事の御膳に供へ奉る行立の先後を定むる事。

右、右大臣の宣を被りて依はく、勅を奉ること聞
くが如し。先代行ふ所の神事の日、高橋朝臣等前に立
ちて供へ奉る。安曇宿禰等更に争ふ所無し。但、飯
高天皇の御世靈龜二年十二月の神今食の日に至り
て、奉膳從五位下安曇宿禰刀、典膳從七位上高橋朝
臣乎具須比に語りて曰はく、刀は官長じ年老いたり、
前に立ちて供へ奉らむと請す。此の時乎具須比答へて
云はく、神事の日、御膳に供へ奉るは、膳臣の職
にして他氏の事に非ずと。而るに刀猶強ひて論ず。乎
具須比肯はず。此の如き相論、内裏に聞こえて勅判
有り。累世の神事は更改すべからず、宜しく例に依
りて之れを行ふべしと。爾より以来爭論有ること无
かりき。

宝龜六年六月の神今食の日に至りて、安曇宿禰廣吉

強ひて前に進みて立ち、高橋波麻呂と相争ふ。広吉を挽き却く。事畢りし後、所司祓ひを科す。時に波麻呂固辞す。罪無きに何か共に祓ひを為むと。是の言上聞し、更に勅判有りて、上中の祓ひを広吉に科せ訖りぬ。其の後広吉等妄りに偽辞を以ちて氏記に加附し、此れを以ちて申聞して、自ら先と為ることを得たり。茲れに因りて高橋朝臣等、敢へて披訴せずと雖も、憂憤の状稍顕はに出づる有りき。

去りぬる延暦八年、私事有るが為に各記文を進りき。即ち二氏を喚びて事の由を勘問し、兼ねて日本紀及び二氏の私記を搜檢し、乃ち高橋氏の先たるべきを知りぬ。而るに事先朝を経、卒かに改むるに忍びず、一先一後、彼此をして憂ひ無からしめむと思欲ほし、未だ所司に勅りせずと雖も、祭事に臨む毎に、二氏に宣知して、通ひに先後せしむ。而るに今、内膳司奉膳正六位上安曇宿禰継成、去年六月十一月十二月の三度の神事に、前に在ることを争ひ、猶進むことを肯はず。仍りて勅りすらく、通ひに先後すべき状、比来頻りに告げ訖りぬ。宜しく此の度は次

に依りて高橋を先たらしむべしと。而るに継成、宣勅を奉はらず、直ちに出席で退き、竟に供へ奉らず。臣たるの理、豈此の如くならむや。宜しく故事に稽へて其の次を定め、兼ねて犯せる所を論じ、法に准じて科断すべしてへれば、謹みて日本紀を案するに、卷向日代官に御宇しし大足彦忍代別。天皇の五十三年、東国に巡狩し、淡の水門を渡りたまふ。是の時鸞駕鳥の声を聞こしめし、其の形を見むと欲ほし、之れを尋ねて海中に出で、仍りて白蛤を得たまひき。是に膳臣の遠祖名は磐鹿六鴈、高橋の祖なり。蒲を以ちて手紐と為し、白蛤を膾に為て進りき。故六鴈の臣を美めて膳の大伴部を賜ふと。其の家記を檢るに略此れに同じ。是れ高橋氏御膳に預かり奉る由なり。輕島明宮に御宇しし菅田天皇の三年、処処の海人訕詬きて命に従はざりき。乃ち安曇連の祖大浜宿禰を遣はして平けし日、海人の宰と為す。是れ安曇氏御膳に預かり奉る由なり。又安曇宿禰等歎して云はく、御間城入彦五十瓊殖天皇の御世、已れ等が遠祖大栲成吹、始めて御膳を奉るて

へり。仍りて其の私記の文を檢るに、追注の行下、

筆迹殊に拙くして字に庶からず、奸詐の端是に見はれぬ。然るときは即ち之れを国史に考へ、之れを家記に求むるに、磐鹿六鴈は質を前に委ね、大浜宿禰は名を後に策す。時五代を経、歳三百を逾ゆ、相去ること懸遠なり。更に先後の次を疑ふべきこと無く、事已に灼然なり。理は高橋を以ちて先と爲し、安曇後に在るべし。又継成偽記を固執して、事に臨み先を争ひ、意を恣にして遁れ去り、遂に供へ奉らず。詔命を承らざるは人臣の礼無きなり。此れをしも正さざれば、何を以ちてか後を懲さむ。仍りて職制律を案ずるに云はく、詔使に對捍して人臣の礼無き者は絞すと。名例律に云はく、詔使に對捍して人臣の礼无き者は大不敬と爲すと。又云はく、八虐を犯し獄へ成る者は除名すてへり。今継成が犯す所、犯に准じ律に依りて絞刑に処し除名せしむ。謹みて狀を具して奏聞すてへり。勅を奉る。宜しく其の死を宥して遠流に処すべし。自余は奏に依れてへり。官宜しく承知して永き例と爲すべし。符到らば奉け行へ。

延暦十一年三月十八日

以上の如く四度に亘つて相抗争したが、結局事件は高橋氏に有利に解決を見るに至つたのである。そこで高橋氏は自家の氏文の正当なる所以を証するために、右の太政官符をその氏文に写し副へたものと思はれる。つまりこの官符をその氏文の charter たらしめようとしたのである。

ところで信友は、逸文一の五十三年云々から安房浮嶋宮までの文章について、「さて上の五十三年云々より此ところまでの文のみおほかた書紀の文と同じくて、なべての文体は異なるをおもふに、高橋の家古記どもをこの氏文に繕写するときの所爲なるべくおぼゆ」と言つてゐるが、かやうにこの氏文が日本書紀によつて潤色されてゐる理由は、斎部広成の古語拾遺の場合と同様であつて、それは諸氏の地位や職掌についての抗争が生じた際には、主として日本書紀に照らして裁断が下されたからに他ならない。右の官符にも這般の消息がよく示されてゐることを思ふべきである。併しながら古語拾遺が書紀の所伝と自家の伝とを接合する場合、自家の伝を悉く書紀と同様な漢文を以つて記し、全体に一貫した調子が見られるのに対し、高橋氏文に於いては、書紀の文はそのままの漢文で援引し、自家の伝は准国文体（宣命書き）で記し、恰も木に竹を接いだやうな様相を示してゐて、その手腕は頗る拙劣と言はざるを得ないのである。

さて高橋氏文を纏めたものとしては、前に述べたやうに、伴信友の高橋氏文考註と校註日本文学大系第一巻所収のもの位である

が、後者は前者に拠つたものであり、前者は種々の写本として伝えられ、又伴信友全集第三に収められて刊行されてゐる。全集所収のものは、初めに天保十三年三月二十日の信友の序がある。それは左の如きものである。

高橋氏文、今の世に在ることを聞かず。たまたま本朝月令、政事要略、年中行事秘抄に引載たるを、とりあつめて読み見るに、その氏の元祖磐鹿六鵬命、景行天皇東国に行幸の時、淡の浮島の行宮にて、大御饌の事に仕奉り、膳臣とめされて膳職の事をゆだねたまひ、大嘗神嘗の献物のことを定め仕奉り始めさせたまひたるゆゑよし、又身まかりたる時、大御使を遣はして宜しめたまへる詔詞を書載せ、そのほかに記せる事ども、ことごとくその家の旧き伝説を書しるせる古文にて、古典に見えざる古事はたすくならず、いともめでたき古書になむありける。然るにそれ引記せる本ども、とりどりに誤写ありて、読ときがたきところ多かるを、年頃その異本どもを得て、見る毎に校へ合せ、また他書どもの中にいささか引しるせるをも併せ見て、互に校へ訂し、さてその事の次第に依りて、三条を表章して、はやく考注を書さしたるがありつるを、此ごろおもひおこしてさらに考そへて、かくは注せるなり。但しさる中にはおのづから強たる説もありぬべく、またくだくだしきことや、ここにいはでもあるべき事をも、因におもひえたるままにいひすぐせるもあり、すべてかたなりにおぼゆる下書なれば、なほつぎつぎに正しあらためてむかし。

次いで逸文三章の原文に返り点・送り仮名を施して掲げ、そのつぎに「高橋氏文考註、伴信友稿」として右の三章に注解を加へてゐる。その後「谷森種松の日影葛の考」が添へてあり、最後に嘉永二年七月九日の伴信近の跋がある。この跋文の前半は、「考註」の伝来についての重要な資料と思はれるから、左に引用することにする。

この高橋氏文考は、父君の中書したまひし本のありしが、いにし弘化三年の神無月十四日とみのみやまひにて身まかり給ひたりしに、書あらはしたまへるくさぐさの書どもの中に、その中書の見えざれば、学の友なる人々のもとにかしおき給ひつることのありもやせむと、ここかしこ問ひ合せたれどしれず。いかなる人に見せたまひけむ。ことし四とせになりぬれど、かへり来ぬぞいともいともあたらしきことになむ有ける。ふみ見るほどの人の、かかることあるべきにあらねど、世には心きたなき人もあるならひなれば、さるかたにかくしもてるにかあらむ。ここに薩摩人山田清安この京に在しほどに写しもてるは、身まかりたまひし年のその春のころ、本書もて写しおきたりといふをききて、こたびかりえて手づからかくはうつしおきぬ。その考の中、後にまた書そへ、あるは削り給ひけん所らもあらむかし。されど今はしられぬぞ、口をしき。(下略)

奥書きは次の通りである。

右高橋氏文考一冊借京師山根氏之本課人令摸写一校訖 神谷克禎

安政五年六月五日、以尾張國人神谷氏藏本摸寫了 新田源朝臣
武智良

以武智良藏本於客江旅寓謄寫畢

文久二年壬戌十二月十日

小杉源真瓶

なほ全集所収のものは、活字本を底本とし、井上頼因氏藏写本及び黒川氏藏写本を以つて校訂した由が記してある。

ところで私も一写本を架蔵してゐるが、それは、美濃版の写本一冊で、下総崎房秋葉孫兵衛藏書並びに秋葉義之の印の朱の藏書印記がある。序から信近の跋までは、全集所収のものと殆ど同一であるが、鼈頭に稀に高橋広道の書き入れがあり、奥書きは、次のやうになつてゐる。

右高橋氏〔文〕考一冊、借京師山根氏之本、課人令摸写一校訖 神谷克禎

右一冊、安政六年二月、借尾張神谷氏之藏本写畢 高橋広道
併しながら本書は高橋広道の自筆の写本ではなさうである。といふのは、同じく架蔵に係る広道自筆の写本「かつみ考」（本書と同じく二つの秋葉の藏書印記があり、万延元年十一月十二日写了）と比較するに、書体が同一のやうに思はれないからである。恐らく広道自筆の写本の転写本であらうと思はれる。

ところで現存する高橋氏文逸文の内容は、前掲信友の序文に述べてゐる通りであるが、要するに自家の始祖なる磐鹿六菟命の朝廷に対する功績をたたへ、兼ねて自家の聖職の本縁を物語るものに他ならない。併しそこには古語拾遺と同様に、自家を優位に導かうとする作為の痕が見られないでもない。例へば、既に指摘し

たやうに書紀に拠つて文をなしてゐるが如きは、その著しい例であるが、

爾の時、磐鹿六菟命申さく、「六菟料理らしめて供へ奉らむ」と白して、無邪志の国造の上祖大多毛比、知々夫の国造の上祖天上腹天下腹の人等を喚ばしめて、膾と為し、及煮焼きして雑造り盛りて、云々。

の如きは、日神石窟隠れの時、斎部宿禰の遠祖太玉命が諸部神を率ゐて種々の物を作らしめたとする古語拾遺の記載を彷彿せしめるものであつて、恐らく自家顯揚のための潤色又は造作であらう。同様な例は他にも認められるところであつて、高橋氏文と古語拾遺の前半とはその揆を一にしてゐる事が知られる。従つて信友の「その家の旧き伝説を書しるせる古文にて、古典に見えざる古事はたすくなくならず。いともめでたき古書になむありける」といふ言は、そのままには承認し難い。なるほど記紀に見えない所がかなり存しはするが、それは古伝をさながらに伝へたものではなくて、後世に潤色改変が施されたものであり、文章も奈良時代のものとは思はれない。併しながら自家顯揚のために古伝に潤色改変を加へることは、かなり古くから行はれたところであり、現に書紀の一書の所伝にもさうした変改の加へられたものが明らかに存してゐる程であるから、高橋氏文は古語拾遺の前半と同様、一面に於いては記紀の物語り製作の態度を継承し、或いはそれを延長したものであるとも言つてよからう。要するにこの氏文の価値は、高橋氏の人が伝説を潤色改変した態度と、その改変された

物語りとを記紀と対照することによつて、奈良時代から平安時代初期にかけての思想の変化が知られる点にあり、又同じ時代に於ける氏族間の関係やそれと制度との関係を反映してゐる点にあると思はれるのである。唯わづかに二つの逸文をとどめてゐるのみで、その全貌を知ることが出来ないのは返す／＼も遺憾である。そこで左にその二つの逸文の原文及び書き下ろし文を掲げ、これに略註を附して大方の参考に供したいと思ふのである。

高橋氏文

逸文一

挂畏卷向日代官御宇大足彦忍代別天皇五十三年癸亥八月。詔群卿曰。朕願愛子何日止乎。欲巡狩小碓王。又名倭武王所平之国。是月行幸於伊勢。転入東国。冬十月到于上総国安房浮嶋宮。爾時磐鹿六菟命從駕仕奉矣。天皇行幸於葛飭野。令御菟矣。太后八坂媛波借宮爾御坐。磐鹿六菟命亦留侍。此時太后詔磐鹿六菟命。此浦聞異鳥之音。其鳴駕我久久。欲見其形。即磐鹿六菟命乘船到于鳥許。鳥驚飛於他浦。猶雖追行遂不得捕。於是磐鹿六菟命詛曰。汝鳥。恋其音欲見其貌飛遷他浦不見其形。自今以後不得登陸。若大地下居必死。以海中為住処。還時願触魚多追來。即磐鹿六菟命以角弭之弓。当游魚之中。即著弭而出。忽獲

数隻。仍名曰頑魚。此今諺曰堅魚。今以角作鉤柄。釣堅魚。此之由也。船遇潮涸。天渚上爾居奴。掘出止為爾。得八尺白蛤一貝。磐鹿六菟命捧二種之物獻於太后。即太后嘗給比悅給且詔久。甚味清造。欲供御食。爾時磐鹿六菟命申久。六菟令料理。天將供奉止白天。遣喚無邪志国造上祖大多毛比。知々夫国造上祖天上腹天下腹人等。為膾及煮焼雜造盛天。見河曲山梔葉天。高次八枚爾刺作利。見真木葉天。收次八枚爾刺作天。取日影且為縵。以蒲葉天美頭良乎卷。採麻佐氣葛天多須岐仁加氣。為帶。足纏乎結天。供御雜物乎結飭天。乘輿從御菟還入坐時爾為供奉。此時勅久。誰造所進物問給。爾時太后奏。此者磐鹿六菟命所獻之物也。即欲給比嘗賜天勅久。此者磐鹿六菟命獨我心耳。波非矣。斯天坐神乃行賜倍留物也。大倭国者。以行事負名国奈利。磐鹿六菟命波。朕我王子等爾。阿礼子孫乃八十連屬爾。遠久長久天皇我天津御食乎斎忌取持天仕奉止負賜天。則若湯坐連等始祖物部意富売布連乃佩大刀乎令脱置天副賜支。又此行事者。大伴立雙天応仕奉物止在止勅天。日豎日横陰面背面乃諸国人乎割移天。大伴部止号天賜於磐鹿六菟命。又諸氏人東方諸国造十二氏乃枕子各一人令進天。平次比例給天依賜支。山野海河者。多爾久久乃佐和多流岐波美。加幣良乃加用布岐波美。波多乃広物。波多乃狭物。毛

乃荒物。毛乃和物供御。雜物等兼掇取持天仕奉止依賜。如是依賜事波。朕我独心耳非矣。是天坐神乃命叙。朕我王子磐鹿六藺命。諸友諸人等乎催率天。慎勤仕奉止仰賜誓賜天依賜岐。是時上綏国安房大神乎御食都神止坐奉天。為若湯坐連等始祖意富禰布連之子。豐日連乎。令火鑽天。此乎忌火止為天伊波比由麻々閑天供御食。並大八洲爾像天。八乎止古八乎止咩定天。神嘗大嘗等仁供奉始支。云安房大神為御食津神者。今大膳職祭神也。今令鑽忌火。大伴造者。豐日連之後也。以同年十二月。乘輿從東還坐於伊勢國綺宮。五十四年甲子九月。自伊勢還坐於倭纒向宮。五十七年丁卯十一月。武藏國知々夫大伴部上祖三宅連意由。以三木綿代蒲葉天美頭良乎卷寸。從此以來。用三木綿副日影等葛天為用矣。自倭纒向朝廷歲次癸亥。始奉貴詔勅。所賜膳臣姓。天都御食乎伊波比由麻波理天供奉來。迄于今朝廷歲次壬戌。並卅九代。積年六百六十九歲。延曆十一年。

註(一)年中行事秘抄には、「日本紀景行天皇五十三年秋八月丁卯朔。子細同高橋氏文。仍不抄之」と記して、次に「高橋氏文云、天皇五十三年」と書き、下文の「是月」を「八月」に作つてゐる。以下は大体同文であるが、略した所がある。(二)年中行事秘抄はすべて「雁」に作る。(三)行以下三十九字、秘抄には「葛飭野令御藺。六雁留守。大

后詔」としてゐる。(四)若以下十三字、秘抄になし。(五)悦以下九字、秘抄になし。(六)天以下三十八字、秘抄になく、「云々」としてゐる。(七)秘抄には為以下三百六十一字を略いて云々とし、「時為三供奉太后詔之」と約記してゐる。(八)この二字は信友の補つたものである。(九)以下、秘抄になし。

掛けまくも畏き卷向日代宮に御宇し大足彦忍代別天皇の五十二年癸亥の八月、群卿に詔して曰はく、「朕、愛しき子を願ふこと、何れの日に止まむ。小碓王又の名倭武王の平し国を巡狩むと欲ふ」とのたまひき。是の月、伊勢に行幸し、転りて東の国に入りましき。冬十月、上綏の国安房の浮嶋宮に到りましき。爾の時、磐鹿六藺命、從駕に仕へ奉りき。天皇、葛飭野に行幸して御藺せしめたまふ。太后八坂媛は借宮に御坐し、磐鹿六藺命も亦留まり侍りき。此の時、太后、磐鹿六藺命に詔はく、「此の浦に異しき鳥の音聞こゆ。其れがくがくと鳴けり。其の形を見まく欲りす」とのたまひき。即ち磐鹿六藺命、船に乗りて鳥の許に到れば、鳥驚きて他浦に飛びき。猶追ひ行けども遂に得捕へざりき。是に

磐鹿六藺命詛ひけらく、「汝鳥、其の音を恋ひて貌を見まく欲りするに、他浦に飛び遷りて其の形を見ず。今より以後、陸に得登らざれ。若し大地の下に居らば、必ず死なむ。海中を以て住处と為よ」と。還る時舳を顧れば、魚多に追ひ来。即ち磐鹿六藺命、角弭の弓を以ちて遊ぶ魚の中に当つる即ち、弭に著きて出で忽ちに数隻獲つ。仍りて名づけて頑魚と曰へり。此を今の諺に堅魚と曰ふ。今角を以ちて鉤の柄に作りて堅魚を釣るは、此の由なり。船、潮の涸るに遇ひて渚の上に居ぬ。掘り出ださむと為るに、八尺の白蛤一貝を得たり。磐鹿六藺命、件の二種の物を捧げて太后に献りき。即ち太后誉め給ひ悦び給ひて詔はく「甚味く清く造りて、御食に供へむとす」とのたまひき。爾の時、磐鹿六藺命申さく、「六藺料理らしめて供へ奉らむ」と白して、無邪志の国造の上祖大毛比、知々夫の国造の上祖天上腹天下腹の人等を喚ばしめて、膾と為し、及煮焼きして雑造り盛りて、河曲山の梔の葉を見て、高次八枚に刺し作り、真木の葉を見て、枚次八枚に刺し作りて、日影を取りて縵と為、蒲の葉

を以ちてみづらを巻き、まさき葛を探りてたすきにかけ、帯に為、足纏を結ひて、雑の物を供御へ結ひ飴りて、乗輿御藺より還り入り坐す時に供へ奉らむとす。此の時勅はく、「誰が造りて進れる物ぞ」と問ひ給ふ。爾の時、太后奏したまはく、「此は磐鹿六藺命の献れる物なり」とまをしまひき。即ち欲び給ひ誉め賜ひて勅はく、「此は磐鹿六藺命の独が心には非ず。斯は天に坐す神の行ひ賜へる物なり。大倭の国は、行ふ事を以ちて名に負する国なり。磐鹿六藺命は、朕が王子等に、あれ子孫の八十連属に、遠く長く天皇が天津御食を煮ひ忌まはり取り持ちて仕へ奉れ」と負せ賜ひて、則ち若湯坐連等が始祖物部意富売布連の佩ける大刀を脱ぎ置かせて副へ賜ひき。又「此の行ふ事は、大伴立ち雙びて仕へ奉るべきものとあれ」と勅ひて、日の堅、日の横、陰面、背面の諸国の人を割ち移して、大伴部と号けて、磐鹿六藺命に賜ひ、又諸氏の人、東の方の諸国の造十一一氏の枕子各一人を進らしめて、平次ひれ給ひて依さし賜ひき。「山野海河は、たにくくのさわたるきはみ、

かへらのかよふきはみ、はたの広物、はたの狹物、毛の荒物、毛の和物供御へ、雑の物等を兼授ね取り持ちて仕へ奉れ」と依さし賜ひ、「かく依さし賜ふ事は、朕が独が心に非ず。是は天に坐す神の命ぞ。朕が王子磐鹿六舊命、諸友諸人等を備率ひて、慎しみ勤しく仕へ奉れ」と仰せ賜ひ誓ひ賜ひて依さし賜ひき。是の時、上総の国の安房大神を御食都神と坐せ奉りて、若湯坐連等が始祖意富売布連の子、豊日連をして火を鑽らしめて、此を忌火と為ていはひゆままで、御食を供へ、並大八洲に像りて、八をとこ八をとめを定めて、神嘗大嘗等に供へ奉り始めき。但し安房大神を御食津神とすと云へるは、今大膳職に祭る神なり。今忌火を鑽らしむる大伴造は、豊日連の後なり。同じ年の十二月に、乗輿、東より伊勢の国の綺宮に還り坐し、五十四年甲子の九月、伊勢より倭の纏向宮に還り坐しき。五十七年丁卯の十一月、武蔵の国知々夫の大伴部の上祖三宅連意由、木綿を以ちて蒲の葉に代へてみづらを巻きき。此れより以来、木綿を用ちて日影等の葛に副へて用うることを為れり。纏向の朝廷の歳癸亥

に次るより始めて貴き詔勅を奉りて、膳臣の姓を賜はり、天都御食をいはひゆまはりて供へ奉り来ぬ。今の朝廷の歳王戌に次る迄、並せて卅九代、積る年六百六十九歳。延暦十一年。

註(一)景行天皇。以下書紀景行の卷には、「五十三年秋八月丁卯朔。天皇詔三群卿曰。朕願愛子。何日止乎。冀欲巡狩小碓王所平之國。是月乘輿幸伊勢。転入二東海。多十月。至三上総國。從二海路渡淡水門。是時聞三覺賀鳥之聲。欲見三其鳥形。尋而出二海中。仍得二白蛤。於是膳臣遠祖。名磐鹿六雁。以蒲為二手纏。白蛤為二贈而進之。故美二六雁臣之功。而賜二膳大伴部。十二月從二東國二還之。居二伊勢一也。是謂二綺宮一。五十四年秋九月辛卯朔己酉。自二伊勢二還二於倭一。居二纏向宮一とある。恐らくはこれに基づいて潤色敷衍したものであらう。(二)日本武尊。(三)孝元天皇の皇子大彥命の孫。(新撰姓氏錄、皇胤紹運録)(四)御狩。(五)八坂入媛命の事。景行紀五十二年秋七月の条に、「立三入坂入媛命為二皇后一」とある。(六)なんち鳥よの意。(七)当てると同時に。(八)俗言の意。(九)艘の意。和名抄に「説文云、艘、船着レ沙不レ行也」とあつて「キル」と訓んでゐる。(一〇)潮の満ちるのを待たないで砂を掘つて船を浮かべようとするに。(一一)大きな。(一二)武蔵。(一三)秩父。(一四)伴信友の考

註には「和名抄安房国安房郡の郷に河曲ハ加波和とある地の山なるべし」とある。(二五)大嘗祭式に「供ニ神御ニ雜物者、大膳職所レ備。多加須、伎八十枚。比良須、伎八十枚」とある。(二六)櫓。(二七)角髪。髪を左右に分けて結び縮ねた上代男子の結髪。(二八)手綱、襷。(二九)脚帶。脛布の類。(三〇)ここでは職業の意。(三一)仕へ奉れにかかる。(三二)信友は「生れまさむ皇子等の尽なき御世の継々になり」と説いてゐるが、さうではなくて六鴈命の子々孫々永久にの意であらう。(三三)天皇の召し上げる食物。(三四)齋み清めて。(三五)膳夫(カシハデ)の職。(三六)東、南、西、北。(三七)信友は「生れて床上に枕がせ置ほどの赤子なるべし」と言つてゐる。(三八)領巾。肩巾。(三九)谷蟻。蟻餘の行くどんな隅々までも。(四〇)「かへら」はカイヘラの約言。船の櫂の事。船の通ふ果てまでも。(四一)大魚、小魚、禽獸。(四二)皇胤であるから親愛の氣持で「朕が王子」と詔うたのである。(四三)膳夫の諸の伴部。(四四)恐らく「いはひゆまはり」と同言であらう。(四五)姓氏録にも「高橋朝臣。景行天皇巡ニ狩東国。供ニ献大蛤。于レ時天皇嘉ニ其奇美。賜ニ姓膳臣」とある。(四六)以下は氏文のもとよりの文ではなく、後に書き加へたもの。

逸 文 二

六鴈命。七十二年秋八月。受病同月薨也。時天皇聞食

而大悲給。准ニ親王式ニ而賜葬也。於是宣命使遣藤河別命。武男心命等。宣命云。

天皇加大御言良麻止宣波久。王子六鴈命。不レ思保佐佐流外爾。卒上太利止聞食迷之。夜風爾悲愁給比川川大坐須。天皇乃御世乃間波、平爾之天相見曾奈波佐牟止思保須間爾別由介利。然今思食須所波。十一月乃新嘗乃祭毛。膳職乃御膳乃事毛。六鴈命乃勞始成流所奈利。是以六鴈命乃御魂乎膳職爾伊波比奉天。春秋乃永世乃神財止仕奉志迷牟。子孫等乎波。長世乃膳職乃長止毛。上總国乃長止毛。淡国乃長止毛定天。余氏波万介太麻波天。乎佐女太麻波牟。若之膳臣等乃不ニ継在。朕加王子等乎志天他氏乃人等乎相交天波乱良志女之。和加佐乃国波。六鴈命爾。永久子孫等可遠世乃国家止為止定天授介賜天支。此事波世々爾之過利違傍志。此志乎知太比天。吉久膳職乃内毛外毛護守利太比天。家患乃事等毛无久在志女給太戸度奈毛思食止宣太麻不天皇乃大御命良麻乎。虚川御魂毛聞太戸止申止宣太麻不。

註(一)年中行事秘抄には、「高橋氏文云。六雁命七十二年秋薨。天皇宣命云。十一月新嘗会モ。膳職御膳ノ事。六雁命ノ勞始成流所ナリ。是以六雁命御魂乎。膳職爾伊波比奉天。春秋永世ノ神財ト仕奉志女牟」と文を略して記してゐる。

六鴈命^(一) 七十二年の秋八月、病を受けて、同じ月に薨^(二)りき。時に天皇^(三)聞こし食して、大く悲しび給ひ、親王^(四)の式に准へて葬^(五)を賜ひき。是に宣命使藤河別命、武男^(六)心命等を遣はして命を宣りて云はく、

天皇が大御言らまこと宣たまはく、王子六鴈命、思ほさざる外に、卒^(七)り上りたりと聞こし食し、夜^(八)に悲しび愁ひ給ひつつ大坐^(九)します。天皇の御世の間は、平かにして相見そなはさむと思ほす間に、別れゆけり。然て今思ほし食す所は、十一月の新嘗^(十)の祭も、膳^(十一)職の御膳の事も、六鴈命の勞き始め成せる所なり。是を以ちて六鴈命の御魂を膳職にいはひ奉りて、春秋の永き世の神財と仕へ奉らしめむ。子孫等をば長き世の膳職の長とも、上総^(十二)の国の長とも、淡^(十三)の国の長とも定めて、余の氏はまけたまはで、をさめたまはむ。若し膳^(十四)臣等の継あらざらむには、朕が王子等をして、他氏の人等を相交へては乱らしめじ。わかさの国は、六鴈命に、永く子孫等が遠き世

の国家と為よと定めて授け賜ひてき。此の事は世々にし過り違はじ。此の志を知りたびて、吉く膳職の内も外も護守りたびて、家の患ひの事等も无くあらしめ給ひたべとなも思ほし食すと宣たまふ天皇の大御命らまを、虚つ御魂も聞きたべと申すと宣たまふ。

註(一)七十二の齡。景行天皇の御世の年数ではない。(二)景行天皇。(三)親王の称は後世に制定されたもので、大宝の繼嗣令に「凡皇兄弟皇子、皆為三親王」。以外並為三諸王」とある。ここは皇子の式といふべきを、後の称を以つて記してある。(四)喪葬のこと万事皇子に准へて行はしめ給うたの意。即ち賻物、殯斂の調度、葬具及び遊部等を賜うた意。(五)天皇の天命を宣讀する者。宣命大夫ともいふ。この語は平安時代になつてからの用語。(六)新嘗祭の膳職の事はの意。逸文一参照。(七)斎ひ。(八)永遠無窮の。(九)六鴈命の御魂を崇め尊んで仰せられた御言葉。「と」はとしての意。(一〇)後の令制の内膳司奉膳に当たるであらう。(一一)信友は「この二国の長とは、そのかみの国造だちたる称にはあらで、もと六鴈命の大御膳に仕へ奉り始めたる国なるが故に、其由縁にてこの二国より貢進御覽の事など総撰ぬる長とし給ひたるなるべし」と言つてゐる。淡は安房。(一二)任じ。(一三)繼嗣。(一四)若狹の国。(一五)家

地として支配する国。(二六)信友は「家患字よみがたし。誤
字あるべし。強て考るに家は宮の訛ならむか」と疑つてミヤ
と訓んでゐるが、姑くものままにして置く。